

【ご挨拶にかえて】

# ドラッカー研究の意味

The Significance of Drucker Studies

三浦 一郎

*Ichiro Miura*

(本会代表, 立命館大学経営学部教授)

一研究者として言わせてもらえば、研究の評価は同時代を生きる人々になしうる性質のものではない。質を判定しうるのは後生の人々である。本当に価値があるのかなど、当座はわからないものだ。

私も経営学と付き合いが長くなる。経営学の世界でドラッカーは不思議な存在である。名を知らぬ者はないが、研究する者は限りなく稀少である。ドラッカーの責任ではない。ドラッカーを評価しうるだけの軸がこれまでの学界の側になかっただけのことである。

私は和辻哲郎という哲学者に心惹かれてきた。和辻はアカデミアの人としてではなく、物書きとしてその仕事を始めた。『古寺巡礼』や『風土』の著者として知られている。40代の中ごろ東京帝国大学に転じるまで、主に京都で活動した。和辻は物事の本質をアナログカルにとらえる異能の持ち主だった。彼は「見立て」の天才だった。見立てとは論理よりも直観の彫塑的作業である。見立ては古寺の庭園や古典芸能、和歌や俳句に多用される日本の風土に根ざす能力である。だが、そのようなあまりに巨大なパターン認識は読み物としてはおもしろくとも、「学問ではない」と評価されることもあった。

和辻は本来東京帝国大学の出身だった。そのせいか、ここしばらくで東京大学の研究者を中心に新しい和辻研究の潮流が起こりはじめているという。確かに和辻はアカデミアの人間ではなかったかもしれない。だが、彼の高度の直観と認識作法は明らかに偉大なる研究者のそれだった。そこには偉大としか言いようのない知識人の風格があった。

考えてみれば、一定の型にはまらない自由な知性の持ち主は全世界にかなりいる。そんな論者ほどに不思議と後生になってからきちんとした評価を受けるものである。尺度が人に追いついていかないだけである。

ドラッカーはある面で和辻に似ている。どことなく飄々として一つの型にはまることがない。何にでも興味を持ち、何にでも口を出す。それがいちいち的確である。

しかも全体として見れば、一定の型、スタイル、ある種の体系性を備えている。この種の論者は学界では扱いにくい。学問的に位置付けづらいものを研究しても、研究者としての評価につながらない。ビジネスの世界でも、上司や同僚に評価されない未定義の仕事が続けるのが難しいのと同じで、評価の対象とならない論文を書き続けるのは酷である。

だが、少しずつ時代も変わり始めているようだ。一昨年の本誌で上田惇生氏が書いておられた。ドラッカーのような領域横断的で複合的多面的な論者をとらえるには、人・思想・学問の三つを総合的に見ていかなければならないと。これはかねてより私も考えてきたことである。その三つを一定のベクトルにもとづき整理し、他の論者との比較の上でその特質を描出する。そして、当該領域に位置づけを模索する。実は最も難しいのが後段の「位置づけ」である。わけてもドラッカーを既存の学問体系の中に位置づけるというのはかなり難しい。私の知る限り、現時点では誰も成功していない。

結局のところ人物研究というのは、究極的には生きて働く存在を相手にせざるをえない。生きて働く全体を討究対象とせざるをえない。ドラッカー学会は現状を見る限り、そのようなアプローチに半ば成功しつつあるようだ。最大の利点は、通常の学会でできない研究が自由で開放的に奨励されることである。特定のプロトコルを参加者や世の中に押しつけない、そのような自由闊達さは財産と言っていい。

作法がアカデミックであろうがなかろうが、価値あるものは価値がある。偉大なものは偉大である。学会にとっての使命は研究することである。研究を継続することである。研究とはある種の知的運動論であるから、不断の研究活動を持ってしかその内実は担保されえない。

知の形姿とは事後的に現れるものである。今は研究活動を継続することである。学会の生命の灯火はそこにしかない。